

書評

『ドイツの図書館 ―過去・現在・未来―』

ブッセ・エルネストゥス原著，プラスマン・ゼーフェルト改訂

都築正巳監訳，竹之内禎・渡邊一由・伊藤淳・佐々木秀憲編訳

(日本図書館協会，2008)

本書は、*Das Bibliothekswesen der Bundesrepublik Deutschland: Ein Handbuch*, Von Engelbert Plassmann und Jürgen Seefeldt, Dritte, völlig neubearbeitete Auflage des durch Gisela von Busse und Horst Ernestus begründeten Werkes Wiesbaden: Harrassowitz, 510p, 1999 の翻訳である。7章構成の原著に対して、本書はそのなかの1、2、7章の抄訳であるが、それでも該当個所の訳文と訳注だけで374頁にわたる大著である。この原著はドイツの図書館情報学界で広く読まれている定評のある本である。そして本訳書は、現代ドイツの図書館活動について、周辺事情や歴史も踏まえて詳述している主要な3つの章を選んで訳出したものである。現代ドイツの図書館事情について、概略的な小冊子は過去に日本でも刊行されていたが、このように詳細を網羅した資料はなかったため、大きな前進である。内容的にも、これまで日本ではあまり紹介されていなかった旧東ドイツ時代の図書館事情についての詳しい記述があり、さらに、東西ドイツ統合に伴う混乱とその克服のプロセスを知る上でも参考になる記述が多数散見される。

本書は3部構成で、第1部(原著第1章に対応)は、ドイツの図書館制度を支える国家レベルの背景や歴史のおよび社会的事情が大局的に述べられている。とりわけ、教育・文化制度と、大学制度の概略、出版流通業、読書・文学活動の推進、図書館の設置・運営・支援機関、東ドイツを含めた20世紀におけるドイツ図書館制度の歴史が述べられている。

第2部(原著第2章に対応)では、ドイツにおける各種の図書館活動が、館種(タイプ)別に詳

細に述べられている。すなわち、国立図書館(全国レベルでサービスを提供するバイエルン州立図書館を含む)、大学図書館、公共図書館、各種の専門図書館(全ドイツをサービス対象とした「中央専門図書館」を含む)の他、教会図書館、音楽公共図書館、アート・ライブラリー、企業図書館、軍隊図書館、刑務所図書館、視覚障害者支援図書館、病院・患者図書館等が取り上げられている。専門図書館とは別のタイプで、滞在研究を主目的とした「研究図書館」というタイプもある。ドイツ国内における外国機関の図書館、外国におけるドイツの図書館、そして、歴史的価値を持つという意味での「博物館的」図書館(宮殿図書館、修道院図書館を含む)も記述の対象となっている。

第3部においては、ドイツにおける司書職制度とその教育のあり方、およびその歴史が述べられている。例えば、ドイツの西側では公共図書館分野と学術図書館分野とで大きな断絶が続いてきたことなど、ドイツ固有の状況を知ることができる。ただし、司書教育についてはその後かなりの変化があり、登場する教育機関の組織改編も行われてきたため、個別的な記述は、現在では若干古い印象を受ける(例えば、すでに統廃合を経て、存続していない大学の過渡的な改革プロセスについて詳しく述べている個所などがある)。

そもそも原著は1999年の発行であり、その後、欧州通貨の統一(ユーロの導入)など、本訳書刊行までの9年間に、ドイツには抜本的な変化があった。このような社会事情を紹介した書物の翻訳にとって、このようなタイムラグの問題は、遅かれ早かれ生じてしまう問題である。本書では、第1部から第3部の各訳文の後に、この変化を補う

入念な訳注を付して最新の状況の紹介に努めている。とくに、主要な機関等については(原著になかった部分についても)URL が記載されているので、それを参照することで現状がかなりフォローできる。

さらに特筆に値するのは、本書の末尾に配置されている、用語索引ともなっている略語・訳語一覧表(382 頁～415 頁)である。この一覧表には、代表的な図書館用語と固有名詞(人物名、図書館その他の機関名)がほとんど網羅されている。ドイツ語の図書館(情報学)用語に関して、これだけ詳しい訳語対照表というものはこれまで存在しなかった。既訳がないため新訳を考えたと思われるものも相当ある。例えば、直訳すれば「図書館助手」としか訳せない 2 つの用語を、文脈に即して「学術図書館助手」「公共図書館助手」と大胆に訳し分けていたり、「資料の形式的な開示」「内容的な開示」を「資料の目録作成」「分類」と意識していたりする。これらは直訳よりも的確な理解を導く適訳であり、訳者の手腕を高く評価したい。

ドイツの図書館事情に関する詳細な内容に加え、入念な訳注、網羅的な用語索引・訳語対照表を備えた本書は、今後永く参照され活用されるべきものであり、それゆえ、ドイツ図書館研究、図書館情報学研究の新たな基礎文献として位置づけられるべきものであると言っても過言ではないだろう。

(鈴木亮太 東洋大学非常勤講師)